

大規模酪農場における哺乳牛群の重度下痢症対策指導事例

中丹家畜保健衛生所

○久保田直樹 林道也

【はじめに】管内大規模酪農場（成牛約 400 頭飼養）において水様性下痢・血便を主徴とする腸炎罹患子牛の死亡が相次いだことから、病性鑑定と結果に基づく指導を実施。【材料及び方法】疾病発生初期、対策指導期、対策指導後の 3 段階において、子牛の糞便、剖検材料を用いた細菌検査を実施。【結果と対応】①発生初期：有症子牛 5 頭の直腸便を検査。全頭から多剤耐性大腸菌、3 頭から *Clostridium perfringens* (Cp) を分離。農場、診療獣医師及び当所で対策会議を実施し、抗生剤使用に関する治療方針を見直すとともに、子牛舎専用長靴の設置や消毒の徹底等、飼養衛生管理を指導。②対策指導期：有症子牛 11 頭、治癒子牛 3 頭、無症状子牛 4 頭の直腸便を検査。16 頭を大腸菌症と診断。また多剤耐性のペロ毒素産生性大腸菌（VTEC）0111 を 10 頭から分離。7 頭から Cp も分離。病理解剖は 2 頭実施し、空腸内容や肝臓から VTEC 0111、*Salmonella* Potsdam を分離。③対策指導後：有症子牛 5 頭、治癒子牛 1 頭、無症状子牛 9 頭の直腸便を検査。VTEC 0111 は分離されず。それ以外の大腸菌について、抗生剤の選択圧変更による感受性菌への復帰傾向を確認。【まとめ】本事例の子牛死亡は、多剤耐性大腸菌、Cp 等の混合感染によるものと推察。治療方針の見直し、消毒の実施等の飼養衛生管理指導・改善により症状は沈静化し、現時点まで再発を認めず。農場は飼養衛生管理の重要性を再認識し、消毒等の徹底を継続。